

昭和六年元旦

新しい年を迎えて舎生の気分も希望と喜びに満ちているようだ。朝、新しい気分で雑煮をいただく。午前中に宮部先生ご来訪あり、坪田君の追悼会の事についてであった。午後、広瀬、桜林、藤田君藻岩山に、若松君と寺岡丸山にスキーに行く。藻岩行きフレッシュマン藤田君下りに於て大分へばった形勢あり。

一月二日

買い初めにて街へ出る。騒々しい空気の中に、正月の気分の現れを充分に知ることが出来た。去年の今夜の兄弟のスキー遭難を思い出して悲壮な当時を忍ぶ。

一月三日 土曜日

今日は、昨年スキー遭難せられ遂に召天せられた舎生坪田信太郎君の追悼記念日であった。午後より八條氏と、広瀬、寺岡の二君共に銭函村十万坪の坪田君召天の地に行く。夜七時より三号室にて坪田君の写真を囲み、宮部先生、八條氏の御臨席を得て静かな冬の夜。過ぎた一年前の今日を思ひ、過去の坪田君を思ひ出して共に厳粛な気分満され、会を閉じる。

一月四日 日曜日

朝早く広瀬、桜林の二君砥石山方面にスキーに行く。午後より川原君独りにて三角山ジールバースロープに行く。夜九時よりしるこの響応あり、残留舎生にて各商店より寄贈された手拭の分配も行はれたり。

一月六日 火曜日

朝九時の汽車で藤田君スキーを持ち軽川に行く。午後より広瀬、若松、寺岡の三君と後から大塚君、三角山ジールバースロープに出掛ける。雪質が悪くて良くころんだ。若松君、合宿帰りの広瀬君のコーチを受ける。今朝は帰省中の兄弟達がそろ 寄宿舍に帰り始め、段々舎内賑かになる。先づ金森君本日朝帰舎しトップを切る。同夜、昨年暮御祖母様を失われ未だ思ひ新らたならん本間君帰舎せらる。

一月七日 水曜日

朝八時の汽車にて大島君帰舎さる。大部都の風に吹かれて来たらしい。今朝は又広瀬、桜林の両君手稲にスキーに行く。今日は良く晴れていたの両君共真黒くなって帰る。十一時頃川原君ユートピヤヒュッテに行く、明日夕帰るとの事。

一月八日 今日愈々始業日にして皆登校する。今朝八時の汽車にて畑君帰舎する。昨日今日の天候晴天にて雪降らない為、残念ながらスキーヤーも家にくすぶるの状態。

川原君手稲より帰る。同夜大岩君帰省する。愈々寄宿舍も平常より稍淋しい位になる。

一月九日 金曜日

さすがに今日は寒く感じた。今日は舎生が誰も帰らなかったの何だか淋く感じた。金森君どうしたものか、昨日あたりより腹痛にて心配せられる。

一月十日 土曜日

夜来よりの雪程良く降り、スキーに良コンディションとなる。午後より広瀬、大島、桜林、

寺岡の四君藻岩山に登る。雪が良かったので愉快だった。広瀬君下りにて足を痛め充分
享樂すること出来なかったのは気の毒だった。諸君のスキー活躍に反し、畑君午後より
急に風邪気を催し、床に臥され、同夜三十九度七分の発熱にて大部苦しげられた。

一月十一日 日曜日

早朝、大島、桜林の両君、安田君と共に手稲山に登る。畑君昨夜よりは充分熱さめ、元
気や、回復する。今朝八時の汽車にて樋口君帰舎せらる。他の舎生も帰舎せられるもの
と思ったのに……。連中は案外暢気なのか、それとも家が恋しくて帰へられないのかも
知れない。何だか全部の兄弟が揃ふまでは舎内は淋しいように感ずる。午後より川原君
独りにて三角山ジルバーに行く。

一月十二日 月曜日

今朝は皆起きるのが遅かった。畑君未だ風邪治らず今日一日も病床に臥される。午後よ
り大島君独りスキーに行く。今夜十時の汽車にて清水、永井、吉川三君元気にて帰舎せ
らる。永井君は昨夜札幌着のはずが、吹雪の為函館に一泊せられたとのこと。北海道の
冬の旅らしいものを経験せられた。

一月十三日 火曜日

今朝土井君帰舎せらる。残るは一人、石君のみ。午後、大岩、桜林、大島、広瀬の諸君
スキーに。夜、土井、寺岡、藤田、清水、広瀬の諸君一号室にカルタをとる。若い人達
は元気よく遊ぶべし。

一月十四日 水曜日

天候よし。弱い冬の陽が積った雪に反射している。そして寄宿舍の前は、子供達の元気
な声ばかり。

一月十五日 木曜日

天気晴朗なれども猛烈に寒し。大岩君風邪の気味か、朝より戸に鍵をかけ、たゞくも返
事なし。

一月十六日

佐藤、南新旧両總長の訓辞あり。夜に入りてはげしく吹雪く、石君一人依然帰舎せず

一月十七日

今朝、石君悠々最後を飾って帰舎せらる。何かよきことありたるべし。

一月月次会を兼ね、例年の如く宮部舎長のもとに舎生先輩一同招かる。先輩にて出席
せらるゝもの、多勢、時田、亀井の三氏なり。先生を始め、先生を始め、先輩諸氏も今
晩一夜小供となりて、或はトランプに、或はカルタに、山の如き馳走に時の過ぐるも知
らず。

十二時一同愉快地先生の宅を辞す。

一月十八日

日曜日なり。川原君早朝より遥か山方面に、桜林、大岩、樋口、清水、金森の諸君を始
め、午後よりは藤田、若松、寺岡、広瀬の諸君円山、三角山方面にスキーに行かる。舎

内に終日くすぶる者二名に過ぎず。

一月十九日

今朝土井君就職の為東京に出発さる。悪い風邪がはやる。舎でも三人が四十度近い熱を出してうめいている。清水、樋口、藤田の三君、はやく良くなって元気になってくれ。

一月二十日

終日静かに雪降る。風邪の三君医師を呼ぶ、段々快方に向はる。

一月二十一日

石、大岩、桜林、大島の諸君元気よくスキーに円山に出掛ける。清水、藤田の二君風邪殆ど癒えし如し。樋口君のみ今日又ぶり返し医師を呼ぶ。養生大切、早く元気になられんことを。

一月二十二日

正に恐るべきスペイン風邪なるかな、三名に加へて、金森、広瀬の二君又病魔におかさる。正に舎生用心肝要。

一月二十四日

朝から風が烈しく吹いた。雪が無茶苦茶に吹き散った。樋口君、大学病院に入院する、早く良くなるように。

一月二十五日

大島、桜林、大岩、石の諸君スキー熱盛んなり。円山、遠くは軽川方面に出掛けらる。病院に樋口君を訪へば、すっかり元気。

熱も下り殆ど恢復せるが如し。舎前のスロープには何處からともなく小供集り一大壯觀たり。

一月二十六日

土井恒喜君元気で帰舎せらる（夜）。

一月二十七日

本日、珍らしくも本間君スソ刈りをして現れる。一月決算六時より、一日の食費六十銭、三十一日の人、二十七円を越す、正月なりし為か高し高し。

一月二十八日

清水君、吉川君、学校をさぼってスキーに行く。樋口君意外にも早く本日退院帰舎さる。早くなほって結構なり。

一月二十九日

吉川万雄君事情により帰省す。吉川君の帰省のため清水文芸部を引継ぐ。

二月一日

日曜のこととてスキーへ出かけるもの多し。

二月三日

本日午後十二時「櫓の音」の原稿を×切る。

二月四日

前日より雪降りスキーに絶好、舎の前のスロープですべるもの、三角山方面に出かけるものあり。永井君のスキー熱は大したものだ、二、三年の後には名スキーヤーになること疑なし。本日は節分なれど、明日御馳走あるよしにて昨年の如くシルコの饗応なし。

二月五日

午後六時より舎内ピンポン大会を行ふ。メンバー戦跡左の如し。(省略) 紅白試合は四対三の接戦で白の勝となる。終了後、一同食堂にて汁粉を食ふ。

二月六日

年中行事の一なる手稲登山を行ふ。参加者次の如し。土井君、畑君、大塚君、広瀬君、寺岡君、石君、大島君、桜林君、大岩君、金森君、若松君、永井君、清水の十三名なりき。七時三十五分札幌駅発、軽川着、直ちに大島君を先頭にヒュッテにむかふ。絶好のコンディションなり。初陣永井君大いに頑張る。二時間後ヒュッテに着き、晝食後、土井、寺岡、広瀬、桜林、石、大島の六君頂上にむかい、残り七名は附近で遊ぶ。一時半ヒュッテ発、コースを夏みちにとる。途中一人の負傷者もなく愉快地下山し、札幌着三時二十九分にて帰舎す。

二月七日

本日、卒業生送別月次会を行ふ。委員は広瀬、桜林、大岩、樋口、石の五名なり。出席者は舎長宮部先生をはじめ、犬飼氏、時田氏、奥田氏及び舎生十三名なりき。卒業生は土井副舎長及び寺岡君なり。開会の辞の後、副舎長挨拶、つゞいて新副舎長の選挙に入り、十七票のうち十六票(一票は畑君)の万場一致で本間君当選す。

次に本間、広瀬、大岩、藤田の諸君の送別の辞ありて、土井、寺岡両君の挨拶に移る。両君感慨無量なるものありき。三人の先輩のお話の後、宮部先生のお話を伺ふ。閉会の辞を桜林君がのべて茶菓の饗応にうつる。その後、来学期の委員の改選あり。(省略)

二月八日

日曜なればスキーへ行ける者多し。永井君手稲へ行つてすっかり自信をつけたか、本朝朝食もとらず円山方面へ出かけて、ヘト になって帰舎して曰く「もうスキーは当分やらぬ」と。

二月十一日

広瀬、大島両君、遙山へ行く。寺岡君、若松、藤田、永井の三新進スキーヤーを引きつれて藻岩山へ行く。祭日のこととてスキーに行かぬ者も多数外出し、一時は残るもの三名なりき。三名は一室によってレコードを味ひきく。

二月十二日

吉川万雄君、夜の準急にて帰札す。

二月十五日

学内スキー大会及全道中等学校スキー大会が行はれた。舎生は、ほとんどすべてスキー或は街に出て舎内は静かである。

二月十六日

試験も次第に近づいてくる。そろ 勉強をし出した人もある。ブランクうづめに苦しむ人もある。

二月十七日

土井君はいよ 卒業のあかつきは満鉄のサラリーマンになることにきまって、その用意も次第にしているらしく、本日は新調の背広をきて、うれしそうに、得意そうに各部屋を廻っていた。前途ある君よ頑張れ 。夜は文武会音楽部の卒業生送別会があったので桜林、大島、大岩、清水の諸君出かける。大島、大岩の両君は来学年度の新幹事となった。

二月十九日

晝食は納豆なれど、夕食は牛なべがたべられた。

二月二十一日

午後六時より決算を行ふ、一日の食費四十五銭也、案外安し。

二月二十二日

日曜なれどスキーへ行くもの少し。ドロウをする者多く、試験の近づいたことが身に泌みる。

二月二十五日

しばらくぶりで大雪がふったのでスキーヤーとルンペン大喜び。桜林君、午後の授業をさぼりスキーに行く、元気な少年だ？
予科の試験日割発表さる。

二月二十七日

降る降る雪が、だけど気温高く浅春の感あり。雪解けのしづくが屋根よりおつる音が俺達に春の近さをしらせている。

三月二日

みな各自の部屋で、それぞれよく勉強す。

三月三日

あたゝかだ、雪がとける、浅春の感じよいよ高まる。明日より予科の試験始まることとて一同猛勉。

三月四日

いよ 学期試験がはじまった。本科マンも予科ボーイも頑張れ。

三月五日

月がよい。月をながめて勉強するも面白からん。

三月六日

永井君、病のところにふす。試験中のことなれば残念ならん。もうじき帰れるはずだったのに。

三月七日

広瀬君及び金森君試験終了し心ほがらかなり。

三月八日

以上二君、他の試験に苦しむのをしりめにかけて遥山にスキーをすべりに行く。

三月九日

予科二年生全部及び若松君試験終了、吉川君及び若松君帰省す。

三月十日

みな(予科)試験終了し、山へ行く計画やら帰省の準備やらでたのしそう。樋口、永井、藤田三君帰省。

三月十一日

朝、広瀬、桜林、大島三君ニセコに行く。

桜林、大島二君は、そのまゝ帰省される予定、夜清水君帰省。

三月十二日

大岩君帰省す(午前)、石、金森君帰省す(午後)

三月十四日(土)

理化、理植試験終了す。深更、広瀬君ニセコより帰舎。

三月十五日(日)

小春日和、陽光うらゝかに金魚売りの声のどかに聞ゆ。飯島君、平戸君来舎。

三月十六日(月)

寺岡君小樽へ製缶実習に赴く。雪とけて道路醜悪を極む。

三月十七日(火)

予科成績発表さる。(内容省略)

広瀬君帰省す。角帽をかばんに入れて帰る。(蓋し舎生一同角帽にて帰る事を大いにすゝめしも流石に面はゆしとみえ、がえんじざりしなり。)雨肅々として降る。

三月二十日(金)

早朝大塚君帰省さる。正午頃より雪ふる。

道路益々悪しくなる。午後笹部君来舎す。

三月二十一日(土)

終日いやな天気なり、これから冬に向ふような、どんよりした日なり。夜川原君帰省さる。残留隊は土井、本間、畑、寺岡の四君のみ。土井、本間両君、宮部先生に御招待さる。土井君能率のよき処を示す。流石はエンジニアなり。寺岡君、夜理髪に行き、頭より光を放ちて帰る。

三月二十二日(日)

本日より土井君欠食なり。本間君明朝帰省の筈のところ、風邪にて延期さる。悪路猛烈を極め、あられまじりの寒風の吹きすさぶ日なり。夜、平戸君来舎さる。

三月二十三日(月)

終日いやな天気、何となく焦燥を感ずるような日なり。

三月二十四日(火)

若松君から来信あり。土井君本日より食事をとる。畳がへを行ふ。総数、新規のもの十九枚まり。土井、寺岡両君、引上げ準備に多忙を極む。

三月二十五日（水）

久し振りの快晴なり。土井君早朝より荷造りに忙がし。夕食後、残留部隊四名、名残りの散歩をなし、充分エネルギーを貯ふ。土井氏は外泊せらる。

三月二十六日（木）

ガスのかゝった陰うつな天候だった。土井君十時頃舎に来る。トランクの整理されて午後三時頃寄宿舎にお別れする。本間君今夜の帰省を控へ多忙を極める。土井君、本間君多くの見送人に守られて車中の人となる。もうしばらく土井君の顔を札幌に見なくなると思うと名残り惜しかった。兄弟の行く年の多幸なれ。

三月二十七日（金）

快晴の一日、昨夜来降った雪も見る見る溶けて汚い粗地が見えだした。郊外の散歩は実に冬のとばりが開け放たれつゝあるを感ずる。舎内は畑、寺岡の二君のみ、実に物淋しさを感じてくらしいなり。

三月三十日（月）

天気快晴、春日和うらゝかなり。畑君相変わらず学校にて製図にいそしむ寺岡帰国の日近づき準備にいそぐ。

三月三十一日（火）

寺岡君本日帰省さる。三ヶ年間の共同生活を送り、今後何時あへるかと思へば、何となく感傷的になるのも無理はあるまい。別れに先き立って最後のレコードをきく、しんみりと。彼の行年に光明あれ。

四月一日（水）

光陰矢の如し、もう四月となってしまう。今日から愈々僕一人で全く孤独の境地におかる。街頭に進出して見ると、小学校の新生が親につれられて歩くのに頻りに会ふ。何となくうらやましいような気がした。

四月五日（日）

本日より食事をとる。今朝広瀬君帰朝す。

蓋し新帰朝のトップを切る。夕食後、久し振りにてだべる。雨しと　と降る。

四月七日（火）

今朝大塚君帰舎す。これでやっと三人となる。昨夜の連絡船は猛烈にあれたる由。

四月八日

早朝より雪が降り、午後に到りて吹雪と化す。四月だと言うのに。朝、金森、若松の両君帰舎。大分賑かとなる。新角広瀬君、初めて登校、講義は二十日からの由にてうんざりしてかへる。工学部、井伊谷教授逝去さる。謹んで哀悼の意を表す。

四月十日

道益々良くなる。畑君、井伊谷教授の葬儀の為中央寺へ行かる。濱口首相三度目の手術

を受く。政界漸く多事。

四月十一日

予科其他学期始めなり。朝、石君帰舎、加藤君入舎せらる。

四月十二日

朝樋口君帰る。寒く朝前の池に結氷を見る。天気ほゞ快晴なり。夜の汽車で本間、藤田、永いの諸君帰る。

四月十三日

朝桜林君帰舎、山根君入舎、土井君卒業、退舎記念として左の本寄贈さる。

- 一、理論物理学
- 一、力学
- 一、科学の価値
- 一、シッダルタ
- 一、チャールス・ダーウィン
- 一、プラトン ソクラテスの弁明
- 一、青銅の基督
- 一、認識の対象
- 一、人生を斯く考える
- 一、自然認識の限界について、宇宙の七つの謎

尚金拾円寄贈さる。

夜、大岩君帰舎。

四月十四日

内閣替る。

四月十五日

朝、大島君帰舎。

四月十六日

放課後、大岩、永井、岩松君と共にテニスコート用の木材を取りに行く。

四月十七日

六時より特別室で一同相談し、八時前に散会す。

四月十八日

増井哲夫君（水産学一）入舎せらる。

シャピロのセロ演奏会あり、永井君これに行く。夕方大岩君増井君をつれ町へ行く。

其他殆んど外出し、僕一人の淋しさを味ふ。

四月十九日

天辰干城（予医一）君、吉田正一（水製一）君入舎せらる。日曜を幸にしてテニスコートのバックネット及びポールを立てるに労と取る。後四時二十分副舎長より慰労あり。吉川君、川原君帰舎、川原君すぐ退舎せらる。（移転先省略）

四月二十日

夕食前、畜産よりローラーを借り舎生總出でコートの修理をなす。但し夕食後にわたり半分の地ならしを完成す。

四月二十一日

夜清水君最後に帰る。三時頃より雨ぎみの天気は終に夜になり雨となる。火事あり。

四月二十三日

新入の舎生のうち、どうやらホームシックに侵されているような人を見うける。誰しも味う病気なり。毎日ひまさえあればレター書きに忙がしい人もある。

四月二十五日

永井君、小樽行。舎の前の沼池のかわず毎夜、夜を通してなきつゞける。

四月二十六日

午前中、郊外散歩日和なり。気の早い連中は、あい鍵利用にて植物園にゆく。町へ出る連中多し。午後ローラーをかへしに行く。

四月二十七日

夕食後、三月及び四月分の決算を行ふ。委員みなつかれはて傑作続出。決算終了後、新入生歓迎コンパを特別室にて行ひ、各自自己紹介をし、たのしくお菓子を充分に口に入れる。

四月二十九日

天長節なり。風吹く、しめっぽい寒いいやな日だ。

五月二日

新入生歓迎月次会なり。

六時より晚餐会を行う。委員の心づくしの御料理に一同舌づつみをうつ。七時半より月次会にうつる。

一、開会の辞 畑君

一、副舎長の挨拶

新入生の歓迎の辞をのべ、寄宿舍生となった以上は、寄宿舍生たる自覚を持ち、自己を犠牲にしてやってもらいたいとのべる。

一、舎生の歓迎の辞

大塚君 まず立ち歓迎の意あれど、その辞をもたづとやる。

広瀬君 寄宿舍をオーケストラに例えて面白く自分の意見をのべる。

大岩君 広瀬君の辞をそのまゝうけ、自分をテンパニーとして紹介す。

終りになって話がいやに説教じみてくる。

桜林君 まずのんでかゝる。曰く「まず歓迎します」世界観確立を叫ぶ、なぜ吾々若い者が集って一のグルッペをなすか、何故に一室に二人居るか考えると。

若松君 簡単に歓迎の辞をのべる。

石君 独特のユーモワたっぷりな話振でやってのける。

清水 ホームシックについて話す、ホームシックにかゝらぬ者は人間にあらずとが
ん張る。

一、新入生の挨拶

加藤君 オーケストラの一員となる以上、その調子のはづれる疑いあれば、それを注
意してくれとのことなり。

山根君 未だ人生観等あまり考えて居なかったが今後大いにやろうとのこと。

増井君 自分は白線にあこがれていたが、水産の学徒となり、いさゝかその寮生活の
できぬことに悲観したが、こゝに入れてもらへてうれしいとの意をのべ
る。

天辰君 犠牲的精神、団体的観念をモットーに大いにやろうという。

吉田君 人間は先ず健康と言いはなつ。

先輩の御話

平戸氏 自分の生理的範囲をこえざる程度に運動せよと注意する。

時田氏 札幌の自然の美及び学生生活について新入生によるこびの辞をのべる。

山口氏 人間は心から笑ってられるうちが幸福だそうです。

今井氏 学生生活が一番楽しいもの也と

奥田氏 一室二人は色々の人とぶつかり角がとれてよいとお話

亀井氏 学生はもう、酒と煙草をさけただけで充分。

鈴木氏 自分はホームシックの先輩である。札幌農学校時代の気風は宮部先生のまわ
りに残存すといわれる。

一、舎長のお話

近頃でない充実した会であったとよろこばれる。寄宿舍精神について御自分の御経
験から話される。

一、閉会の辞 藤田一君

終って一同御菓子をいただいて十時すぎに散会す。ヘボヌキ、寮歌などで時をすごして
十二時に至る。

春の委員左の如し

畑君、大岩君、大島君、金森君、藤田君

五月三日

朝少し雪降る。実に寒くていやになる。藤田康君（予農二）入舎さる。

五月四日

今日はあたゝかだ。やはり春はあたゝかいのがうれしい。清水自己の都合上、石君に今
後の日記をたくす。

五月五日

朝より断然好天気、大部分の舎生は大掃除に取りかゝる。おかげで折角のねむりも目が
覚めてしまふ。樹木こそ未だ冬のまゝなれど、ローンは例により緑の肌を日光の直射の

下にあらはして、学園内は可愛い子供達にて賑う。舎生のテニスを行うものあり、地ならし不十分のためバンド不確実、五月の節句とかで食事部主催のコンパがあった。遺憾ながら時間を守らず、そろ 新入の夢破れてもよきに七時以後になるも大なる笑声話声静かなるべき廊下を流れ、さぞ勉強の方に迷惑ならん。

五月六日

今日も珍らしき好天、憂鬱な北国にも愈々春期到来せりと言いたくなる。舎生の植物園行きも多くなる。新入生の元気な姿(来札当時は大分メランコリーになっていたようだ)が一入感ぜられる。夜は散歩するに好適と見えて玄関のフダも大部分は赤くなっている。舎内は水をうった如く静かだ。

五月七日

最近の永井君の頑張り賞すべきものあり。

今朝彼は四時半に起床したらしく、石、大岩の両氏これに対で七時前に起床。予科選手壮行式雨中を衝いて行はる。ピンポンの音が食堂より聞えてくる。

“Der Fruhling”鑑賞に行きし者多し。

五月八日 賀川〔豊彦〕氏の講演が公会堂に行はる。

四、五人聞きに行く。愈々明日薄別旅行に出掛けるので食事部委員忙しいようだ。副舎長自ら寄宿舍の門側のローンの手入りをなしていた。石君手傳ひをなす。遂には周囲に垣根を作る予定なりと。本間先輩より手紙ありて、今度農林省に就職せりと、これで青年寄宿舍卒業生の就職率は百パーセントなり、頼もしいかな。

五月九日 雨降らざれど曇天にして風益々強くなる。本日は舎生の薄別鉱泉旅行の日なり。

(但し大塚、大島、金森の三氏都合に依り中止)目的地には臨時定山溪バスにて行く予定なので、舎生拳って二時前に停車場前広場に集り自動車の来るのを待ちいたり、然し二時になるも来らず、唯わけもわからぬ使ひが来て勝手なことを言ふていた。こゝに於て我々憤慨し二時四十分頃来れる彼の自動車にて事務所に至り、その正否をただす。彼曰く、自動車の故障に依れりと、故障したら直ちに寒い中で待っている我等に相当の使人が来て知らすべきに、それをせざるは如何と反駁す。結局、我等正義者の勝利になり。最早、我等の純なる精神はこれによりて損ぜられ、やゝもすれば折角の旅行も不成功に終らんかと心配しつゝ三時過ぎ自動車にて出発、五時半頃全部薄別到着、六時半夕食、その頃から皆愉快になる。最初新入舎生のかくし芸拝見、其の後ヂェスチャーに入り仲々の表情、みな腹をかゝへて大笑す。九時半終り、各自風呂に入り、ストームをやる者あり、名前は書くに及ばず。

五月十日 六時半頃より起き出す、但し筆者はその頃は白河夜舟なり。晝前を入浴や休養に費し、充分に山間の気を吸ひ込む。詩でも浮んできそうな所だ。あれが晴天でもあったら尚更のび してしまふことならん。十二半頃晝食、ごろ して二時宿をたつ。帰途は電車にて豊平まで、市電にてすごし。豚汁が我等の帰りを待っていた。

愉快なりし旅行かな。最後に旅行参加者氏名を記すれば、本間(副舎長)、畑、広瀬、

大岩、清水、吉川、樋口、加藤、桜林、吉田、藤田（康）、藤田（一）、増井、山根、天辰、若松、永井。

五月十一日 旅の疲れも見せず皆元気よく登校せり。天候は余りよからず。大岩君よき便りがあったらしく大分はしゃいでいた。

植物園の樹木も緑を増し、毎泡名も知らぬ鳥来りて春の歌を歌ふている。

五月十二日 晴天、石君歯が痛いと言ふてしょげかへっていた。桜林君新聞部に入会したので帰へりが大変おそい。夕食後、舎生の砲丸投げをやるもの多し。天気が良いので屋外でピン している。清水恒久君都合に依り本日退舎せらる。

五月十四日 秋葉君、荷物片付けに来る。

五月十五日 今日より完全に秋葉君舎の人となる。（欠食）。暴風が処々方々を吹きまくっておれども花見の客は断然多いようだ。

風船玉を持った人々で電車は何れも満員なり、市電気局ホク だ。三吉神社の御祭典で花火しきりとなる。桜林君と大岩君断然早起きしてテニスをなす。

五月十六日 風強くして雨混り大暴風雨なり。我が舎は五時半に出発して円山に朝さくら見物と洒落込む。大塚君昨夜おそかったと見えてこの挙に不参加。文芸部委員牧笛の原稿を本日配る。六月五日メ切の予定なり。公会堂にてセルシンとかいう新樂器の音楽会あり。北大マンドリン部臨時出演せり。北大農学部長高岡熊雄博士の任期満了に依り後任部長選挙の結果、現農実主任須田金之助当選せり。

五月十七日 折角の日曜日雨にて台なし。

藤田技師の修理に依り舎のラジオが聞けるようになった。先ず慶明戦を聞く。完全に入る。平戸先輩遊びに来る。今年度最初のカッコウ鳥の鳴き声をきく。新渡戸博士の国際連盟に関する御講演が公会堂にてあった。

五月十八日 午後三、四時限の時間を割いて中央講堂に於て新渡戸博士の講演があった。演題「母校に帰りて」先生は学生諸君創立当時の精神に戻れと力説せられた。高遠な人格を持てる個人主義の養成。国体の許す範囲に於ける新社会の創造（決して現代社会を破壊してと言う意味ではない誤解せぬよう）。パイオニアスピリットを以て開拓せよ。午後三時半からは公会堂に於て「学生生活と宗教」と言う話があった。七十二才にも御成りになって毎日の御講演はさぞかしお疲れのことと心配する次第である。正門の通りのエルムは二十年前の博士夫妻の御移殖されたものなるとか。母校に帰りて感慨深かからん。

五月十九日 予科生に対して新渡戸先生の臨時講義があった。「学問する心」という題で。

五月二十日 農学部主催「国際経済と人口問題」なる演題にて先生の御講演が一時半より三時十分迄あった。明日は一時半より三時半迄この連続講演をなされる筈。

五月二十一日 文武会デー第一日目は六時より公会堂に於て映画の夕である。口八なるためか、すし詰めの景況で大したものだ。

吉田君すそ刈りをして来たのでみんなにひやかされ、テレたようだ。

五月二十二日 文武会デー各部大会なり、あいにく朝から雨が降って折角の競技も水泡に帰せり。六時より決算を行ふ。一日分の食費は四十四銭なり。

五月二十三日 毎年の様に今日の新入会員歓迎会は雨天のため公会堂で午前九時より行はれた。一昨年の如く雑然とならず行儀良く各自が職権の交換をなせり、各個人の人格が向上したためか、或は食い物の数の少きためか？南会頭、新島理事長、柳副理事長の挨拶に次で各部紹介、それから余興に入る。（一、手品、二、漫談、三、松竹座樂劇部の舞踊、大部分艶けし）これで教授と学生生徒間の親睦が増されたことならん。

五月二十四日 今日も雨、舎生の大部分は一日中籠城せり。六時より公会堂に於て桜井忠温氏の講演ありき。

五月二十五日 午後七時より中央講堂に於て与謝野夫妻の「歌に関する話」があった。

五月二十六日 畑君九時の急行にて帰省された。広瀬君よりピンポン球の寄贈ありき。

五月二十七日 今日も雨、連日の不順なる天候にて憂うつになり勝だ。皆のためにより春の訪れんことを。来る六日、第二回月次会開催の旨発表ありたり。委員は広瀬、桜林、若松、増井の四名なり。

五月二十八日 毎日の雨天続きで屋内遊びのピンポンが盛んだ。

五月二十九日 天辰君予防注射がきゝすぎて痛いといふていた。十二号室に四、五人集つて権太らしいきものをしたようだ、但し保証の限りに非ず。

五月三十日 雨模様にも拘らず土曜日のせいか大部分外出してヒソソリとしている。夜分は三つのグループに分れて駄弁していた。石、秋葉の両氏丸井記念館に於ける公開講演会（北大学生、生徒）を聞きに行く。

我が舎の先輩奥田義正君医学博士の学位を授けらる。

五月三十一日 加藤君胃ケーレンで一昨日より床に就く。今朝も大分痛んだやうで三時半頃医者を呼びに行ったそうである。晝頃より落付いて元気だった。丸井記念館に於ける北大音楽部のレコードコンサートに聞きに行きし人多し。実家専門部競技会北大トラックにあり、吉田、秋葉、増井の三君八時頃より応援に出掛けた。今年も林実が優勝した。桜林、永井、吉川の三君三角山登山を敢行せりと、雨が降っていたにも拘らずに。

六月一日 加藤君の腹痛未だはつきりせず、今晚も医師を呼んで見た。初夏の味をかみつゝ勉強に念を入れ後顧なからんやうにと副舎長より発せられり。秋葉君日本古来の音楽尺八を始めた。これで寄宿舍には石、秋葉の両君が尺八組となる。一寸雨が止んでいたのので新人スポーツマン盛んにテニスをやっていた。将来有望なる人ばかりなり。

六月二日 朝から五月雨、憂うつたらざるを得ない。藤田君一寸風邪をひいたと見えて夜分水にて頭を冷す。この不順なる天候のために皆の病気に負けぬやう各人注意ありたし。

六月三日 畑君急行にて帰舎す。牧笛原稿の締め切も目前に迫っているので、そろ 集つて来た。実にうれしい次第である。

六月四日 永井君神経衰弱とか言ふてひる間ねていた。何かコンディションが悪いのだろ

う。

六月五日 牧笛原稿締め切日なので十二時迄待っていた。大部分は出してくれたが、何時ものやうに四、五人は未提出だった。其の内また催促するつもりでいる。青年寄宿舍の雑誌だもの。

六月六日 五時半より月次会を催す。宮部先生並びに奥田先輩、時田先輩がお出でになる。特別に予科主宰青葉万六先生をお招きもうしあげ、為になるお話を聞くことが出来た。藤田康君、秋葉萬次郎君の新人の挨拶があった。割合に盛会だった。十一時過ぎ閉会しへボヌキ、寮歌合唱をして十二時頃食堂の片付けをなす。

六月七日 今週の日曜も亦晴天ならず、舎生何処へも出られず各処に於てお茶をのみながら天気に対するウップンをはらしていた。

しゃくに障る天気だ。

六月八日 朝は曇っていたが晝頃からエルムの蔭もはっきりうき立ち、其の下でしづみ享樂せんとする輩沢山見える。テニスをなす者あり。清水君一寸遊びに来たようだ。

今回、藤田康君 自転車を寄宿舍に持ち来り、大に舎生の便利をはかる。

六月九日 一寸晴れたのでテニスをなす者あり。新人のテニスものすごし。

六月十日 時の記念日なり。牧笛発刊の日なり。三時頃まで起きていて、やっと製本し終わった。(第二次締め切りは今日の十二時までだったので)、大岩君が捨てゝあった小犬を拾って来た。母恋しと盛んに泣いていた、気持悪いほどなき続けていた。

六月十一日 大塚君九時の汽車にて忍路臨海実験所に赴く。試験が近づいて来たので勉強に取りかゝった者があるらしい。試験の話が台頭して来た。舎生の大部分外出し一時静かだった。

六月十二日 大学農場から草刈器を借りて来て、寄宿舍の回りのローンをきれいにする。札幌神社のお祭が近づいたので笛や太鼓の音が響いて来る。多分勤き隊の練習の為であろう。

六月十三日 入梅になったせいか又雨天になり、道は相変わらずヌカルミ現出す。これが暫時続くかと思えば憂うつにならざるを得ない。今月二十日月次会開催発表になり委員は石、吉川、永井、吉田の四氏に決定す。

六月十四日 対高商野球戦にして朝来より雨が降っていたせいか応援団は少し、舎生にても応援につきし者は四人のみ、如何なる理由なるためか?グラウンドは小樽花園球場にして雨のための水溜り、バウンド確ならず、二時開戦が四時迄延びてしまい一回目に高商0、予科3にして其の頃より雨又降り出し審判官の申出により中止となる。結局ドロンゲームなり。他の一部分の舎生は島松に鈴蘭狩に行く。時期が早かったと見えてツボミばかり多くて沢山取れずに帰って来た。鈴蘭まで凶作なるか。

六月十五日 札幌神社御祭典のため大学は午後の授業はなくなった。天気珍しくも晴れた。札幌神社参拝、市内散歩、郊外散歩、寄宿舍籠城の四組に分れた。工科の連中は製図とか言ふて青くなっていたようだ。不景気にも拘はらず人出は減少せず或は増したぐらい

なり。創成河畔の見物師断然よろこびの体なり。

六月十六日 朝の中曇天なりしも遂によくなる。植物園にも大分入場していた。大塚君夜忍路より帰舎す、元気一杯で。

六月十七日 非常なガスで電燈の光がかすかに見えるくらいなり。ロンドンの霧もかくやと想はずに足る。十一号室に五、六人集りあみだを引く。山根、吉田の両君頭がきれいだったので割り増しをとられた。

六月十八日 第三学年生の実砲射撃、吉川君勤務仰せつけられ六時四十分頃学校に入った。本当にご苦労様だ。金森君夕張方面に行った、大分朝早かったようだ。月次会委員街に買出しに行く。

六月二十日 予科対高商の野球戦あり、予科大敗し先週の意気込みも何処へやら、予科ボーイすっかり意気消沈せり。

今学期最後の月次会を催す。先生はじめ亀井、時田、多勢、平戸の四先輩御出席になり稀に見る盛会だった。七時半に開会して九時半閉会す。終了後委員の改選をなす。投票の結果左の如し。(略)

六月二十一日 本間君足を痛めて昨夜一晩ねむれなかったそうだ。本当に気の毒の極みだ。大塚君は平戸先輩と島松ヘリリー狩に行き一杯採って来られた。先週行きし者盛んにくやしがる。畑、大島、桜林、増井の四君三角山へ、永井、吉田の二君藻岩山へ夫々行って来た。

六月二十二日 第二時限後中央講堂に於て、バターフィールド博士の御講演あり。博士はクラーク先生の居られた学校の学長を長い間やって居られた。最後の言葉に「農業共同作用を通じて人類同胞主義に行け」と力説された。通訳者は高杉教授なり。有志の好意ある助力に依り玄関前の広地に「サルビア」の苗を植えた。十月頃花の樂天地展開せん。七時半より今学期最後の決算をなす。一日の食費四十五銭なり。

六月二十三日 水産専門部は遂に試験発表になる。愈々もって試験らしくなる。

六月二十四日 初夏の郊外益々緑を加え、散策には絶好なるも、試験間際なので舎生みな一室に閉ぢこもる。やがて開かれん試験のために、天辰君気分転換とか言って活動に行く。すっかり落ち着き払ふ。

六月二十五日 タンクが月寒に着いたので実家専門部生見学に行く。明朝は予科と臨教生なり。折角の見学も雨天で大分ひどかったことならん。臨教では今日一課目試験を行ったとか。余暇の試験科目発表になる。三年農業一番早く終了し三日より七日までなり。夏期では寒いほどの天候なり。

六月二十六日 予科生タンク見学。

六月二十七日 雨降りて試験が近づいて憂うつになって居るところに益々憂うつさを加ふ。土曜日のせいか、舎生各処に集り試験勉強の疲れを慰す。新入生そろ ホームシックにかゝる。

六月二十八、二十九日 試験勉強で舎生に異動なし。本間君日曜日(二十九日)に笹部先

輩より苗を買って来られた。道が悪くてひどかったことでしょう。

六月三十日 今日で予科、水産専門部の授業はすんだ。あとは愉快的試験のみ、諸兄大に頑張り給へ。

七月一日 試験前の静寂さ殊によし。

七月二日 水産専門部試験開始さる。舎生の出来具合はよいとの話だ。本間君十時の汽車にて帰省さる。そろ 学部の人も休みになるので、学内は益々静かだ。奥田先輩釧路病院の副院長として今晚八時の汽車にて単身彼地に出発なされた。舎生見送る。

七月三日 予科は今日から始まる。大部分数学は失敗したらしい。

七月四日 試験の中休みとも言ふべき奴か、今日は土曜日なので幾分気分が落ち着いている様子だ。街に散歩に出掛けた人もいる。

毎年感ずることだが競馬場通ひの自動車のため北五條道路は埃又埃だ。

七月七日 金森、大岩、石の三氏先ず試験終了、朗かな様子だ。畑君、広瀬君公表せずに今晚帰省さる。

七月八日 予科（工二、医一、二、三）水産専門部試験終了、少し賑かだ。天辰君喜びに満ちて九時の急行にて帰省さる。元気だった。

七月九日 今日でやっと試験全部終了。千秋庵にて留別コンパをなす。稀にみるなごやかな会だった。出席者、大塚、大岩、樋口、桜林、加藤、金森、藤田（一）、若松、永井、増井、吉田、秋葉、大島、山根、石の十五君なりき。吉川君朝早く長輪線廻りにて帰省、藤田（康）君も十二時の鈍行にて帰へる。段々寄宿舍も淋しくなってきた。

七月十日 今日から再び競馬が始り、やかましくてたまらぬ。久しぶりに晴天だった。増井君旅行部の空沼方面に参加し、今朝元気よく出発す。桜林君も手稲山の自然の美を享樂せんとして単身出かけた。石、永井、若松、藤田の四君晝飯持参にて真駒内に散歩に行く。夜の八時の汽車にて大岩、秋葉の二君帰省の途に就く。舎生の桑園駅まで見送る者あり。

七月十一日 今日も天気よし。五、六人にて静かに朝食をとる。樋口君、永井君、藤田君、長輪線廻りの汽車にて帰省の途に就く、ドウヤ湖に寄るとか。札幌の夕は涼しく誠によし。星はまばたき夏らしい、帰省するも惜しい位。大島、石の二君宮部先生宅に訪問し挨拶をして来た。九時頃より十一号室にてコンパをなす。輪を作って気分を出しながら一夜を過ごす。試験後で誰も苦情を云わず実にのんびり出来た。相会する者、吉田、若松、金森、山根、桜林、大島、加藤、石の八名なり。山根君頭をキレイにして来る。蓋し明日帰省するがためならん。現在では長髪組の方が断然多し。

七月十二日 今日から拓殖博覧会だ、朝早くから盛に花火が打上げられる。昨日一寸見て来たが半分も出来て居らなかった、気の強いのにあきれた。夜の鈍行にて先づ山根、吉田の両君元気よく帰省す。寄宿舍独特の踏切にて送らんとせしに、彼等二人新米なるためか首を出して居らず、結局我等の好意を無にしてしまった。九時の急行にて大島君帰省す。今度は我等残留部隊余りお茶飲み専念し、急行の踏切通過を忘れ大島君に失敬

した。寄せ書きして後から彼にはがきを出す。

七月十三日 天候よきも風割合に強く埃だらけだ。

七月十四日 増井君本日山より帰舎する予定なるも未だ戻らず。聊か心配なれど隊をなし
ての旅行なればだいじょうぶならん。加藤君パンを求めて来て明日の帰舎の元気をつけ
た。

七月十五日 石君帰舎（午前六時の汽車で）、加藤君帰舎（午前十時三十分の汽車で）、
増井君夕方元気で山から帰舎す。

七月十六日 夜八時四十三分の帰舎で金森君根室に帰着。同じ列車にて桜林、増井良訓も
屈斜路方面の旅行に出発し、残留舎生は若松、大塚の二人となり舎内いと静かなり。

七月十七日 若松君、親戚に行つて二、三日泊り、十九日頃帰着する積りだと云つて午前
中舎を出て行く。

七月二十四日 午前七時の汽車で桜林、増井両君帰舎。

七月二十五日 午後八時の列車にて増井君帰舎す。

七月二十六日 午後一時十六分の普通列車にて桜林君帰舎。

七月二十七日 天辰干城君の父上が晝頃舎を訪問せらる。干城君の部屋を見たいと云われ
たが錠を下してあるので、六号室をお目に掛ける。室内雑然として居り、六号室生聊か
赤面す。

七月三十日 朝の準急にて大塚帰舎す。

八月二十日 夜、大塚帰舎す。晝間、兎群横行するほど舎内静かなり。

八月二十八日 夜、本間君帰舎。

八月三十日 朝、石君帰舎、夜若松君帰舎。

八月三十一日 予科ボーイの夏休み最終日だ、街もそろ 学生で賑はふ、夕方大島君帰
舎、相次いで加藤君帰舎、いずれも元気一杯。

九月一日 朝樋口、吉川、天辰三君帰舎、愈々夏休みも終り今日より第二学期、よく遊び、
よく学べし。

九月二日 朝山根君、夜桜林君帰舎。各室の古い畳の表がへ為し終る。

九月四日 朝より曇りにて風吹き冷氣身にしむ。本日午後吉川万雄君一身上の都合に依り
て退舎す。君は本学期文芸部委員たる人、舎誌の第一人者たる人、文芸部のため惜しむ。
夜、藤田一君帰舎さる。一号室にて大勢十二時迄雑談に耽る。

九月五日 朝雨模様なれど夕方晴れて爽かなり。土曜日なれば散歩に出掛ける者多し。
夜平戸氏来遊す。本日も帰舎せる人無し。

九月六日 朝の汽車にて大岩、永井両君帰舎す。両君とも大元気、殊に永井君頭髪短く顔
日にやけて意外の健康体を示せり。本日空曇りて陰うつなれど、午後散歩に出掛る人又
はキャッチボールをやる人等、日曜日らしき光景を呈せり、寄宿舍やうやく賑かとな
る。

九月九日 午後、畑君帰舎す。夜ほとんど全舎生外出し舎内いと静かなり。

九月十日 金森、広瀬、増井三君帰舎、運動部員の先導にてコート草取りをなす。

九月十一日 朝の七時二十五分で大塚君、体悪コンディションの為帰省、一日も早く快癒のほどを祈る。又石君の所への手紙により、九月三日秋葉君の御尊父の亡くなられたのを知る。謹んで哀悼の意を表す。

又本日左の発表あり。来る十一月三日明治節の佳日にあたり、当舎の創立第三十四回記念祭を挙行致すに付き舎生諸君の御協力を求む。尚委員は左の如し。(略)

九月十二日 朝から雨に降られてうんざりする。午頃、藤田康君帰舎。今学期新コンビネーション左の如し。(略)

九月十三日(日)

朝依り晴天にて郊外へ出る者二、三人あり、運動部発起にてコートバックネットの上を張る、夜になりその慰労のコンパあり。本学グラウンドにて対東北ラグビー戦あり本学チーム善戦、二十一対十三のスコアにて勝つ。

九月十五日 夕食後、今学期始めてテニスコートにラケットを振ふものあり。広瀬君旅行より七時半頃帰舎(欠食)。

九月十六日 広瀬君十二号室を大掃除してから引越し能率の良い所を見せる。

九月十九日 土曜日なので總出でテニスコートの手入れをなし、新しいラインに躍って見る。支那兵の満鉄線襲撃による日支衝突事件おこり、死傷者多数あり、満州一体不安につまられたる由、悲しむべき事なり。

九月二十日 朝、幸に快晴、一、二、十一、十七号大掃除をなす。又七時よりベルトラメリ氏の独唱あり公会堂へ三、四名にて聞きに行く。夜、大島君十勝方面へ出発。

九月二十一日 午前十一時関東地方に大地震あり、被害甚だしき由。午後六時より決算を行う、一日五十八銭なり。

九月二十二日 明日支笏湖へ旅行の為、食事部、荷物の分配に苦心す。郊外へ出掛ける者多し、吉田君まだ帰らず。尚本日文武会の第三十五周年に相等し、中央講堂に於て式挙行続いて学内開放あり。

九月二十三日 めぐまれたる好晴なり。午前八時、支笏組元気よく満員電車にぶら下りながら出発す(但し畑、石、増井、天辰、秋葉の五君は都合にて中止)。午前、石、増井、天辰、秋葉の四君運動会に行く。夜は新聞部主催の講演会に行く。畑君は終日とごこもりて実験報告制作に忙がし。

二十三日早朝より起き、割合に要領よく苗穂発八時三十分の汽車に間に会い千歳に向ふ、先輩犬飼氏も支笏湖へ行かれるとか同じ列車に乗合う。一時間半の車中もトランプに興じ、間もなく千歳に着く。犬飼氏達の自動車と分れ、直に出発。支笏湖からの流れを左に行くこと約一時間と四十分にして孵化場に着く(十二時)。川の流れを前に樹影にてニギリ飯をぱくつく。其の間おもむろに見渡せば、へばったもの相等あり、よって第四発電所まで王子製紙鉄道に乗ることにして一時二十分孵化場出発、やがて鉄道に出るも

汽車延着、ひまのまゝトロに興ず。後鉄道にて所謂クツマリまで行き、そこで車をすて湖畔までテクルことにする。

(但し、藤田一、広瀬、山ねの三君は、そのまゝ湖畔まで) 道は鉄路に沿ふて単調なるも、うっ蒼とした原始林は常に変化をもたらし、曲折した川の流れと共に、いつの間にか一行を湖畔まで送ってくれた。

湖畔に着けば先発の三君の出迎へを受け、恵庭、エボシ岳等、雲にまかれた彼女達のなつかしい肌を見ながら例の宿につく。番地は苫小牧局管内支笏湖畔休泊所の由、番地を誤れる為、何の用意もなく風呂もなかったのが淋しかった。着いて始めて寄宿にリュック(キャベツ、砂糖、醤油入)を忘れたりを知り一寸悲観したが、風呂なぞ何こそと夕刊にも湖畔に泳ぎに行った広瀬、桜林、藤田(一)、永井の三君の帰る頃、食事部の苦心になる牛鍋に十二分に腹を嬉しがらせ、トランプ遊びの後、一同湖畔に出る。長いだら坂を静かに下りて湖畔に出れば、エニワ、エボシ、タルマエ等夢のようにかすんで、折からの月明に白魚のようにくだける細波、大きく流れている雲、すべて悠久眠っている夜の自然は美しかった。プリズムのように清い空気を通して黒い星影すら見えるようだった。タルマエからは湧き出るように雲が流れて来た。

何と大きな、そして豊富な自然の美しさだろう。僕等は存分顔をうづめて泣きたいような衝動にかられた。何だか暖くなって来た。くもが出て来たのだろう。湖畔の細波だけが同じリズムを繰返へしていた。途中二つのキャンプを見ながら帰路につき、十一時を過ぎる頃は、今迄だべっていた者もかすかないびきに変わっていた。

九月二十四日 ひえびえする秋の冷気を感じながら出してみれば、はやエニワは暖かそうに魅惑的な肌を朝日に出していた。簡単な朝食をすませ、合議の結果すぐ出発する組(本間、広瀬、大岩、山根、加藤、金森)といま少し名残りを惜しまんとする居残り組(桜林、樋口、藤田一、藤田康、永井、若松)とに分れ、先発隊は八時二十分湖畔出発の列車にて、他は一時二十分にて、それぞれ千歳発十二時半、三時四十分の列車にて、いづれも元気に帰舎。秋の愉快さを満喫したほゝえみに皆の顔は輝いていた。

本日、大岩君より左の書籍の寄贈あり

- 一、死刑囚の思い出(吉田大太郎遺著)
- 一、人間味
- 一、現代式探偵科学

九月二十五日 朝、大島君帰舎。大塚君より葉書あり、もうじき帰舎なさるそう。満州問題に関し終に声明書を発し、国際連盟の勧告を辞退す。

九月二十六日 十五夜なり、夕食後一同豊平川畔に月見の宴をはる。曇りがちなも風もなく、たき火を囲み、トウキビ、豆、餅等食し、石君の尺八あり一夜の清遊を尽せり。

九月二十七日(日)時折、小風あれども舎内テニス大会を挙行す。戦績左の如し(略)。試合ははじめより接戦を見せ、若松、秋葉-広瀬、大島組は天下分け目だけに手に汗を

握らしむる好戦なり。尚試合後、二時よりしるこの饗宴あり、かくて秋期テニス大会を終了す。午後より雨となる。

九月二十九日 雨がちなれども、予三、及び臨教、野外教練実施さる。併し想定を変更し第二農場東北の草地にて行なわれた。

九月三十日 十時半より中央講堂にて国司中将の講演あり、満州事件漸く外交問題に移る。

十月一日 早いものだ、今日で早や九月もすぎて新しい月を迎える。予二及び実科専門部の野外教練実施さる。札幌村方面とか相等おそく帰って来た。

十月二日 十時半より中央講堂にて英国オックスフォード大学教授スリーター氏の科学と唯物論と題する講演あり。

十月三日 昨日に続きスリーター氏の英国の憲法の発展なる講演あり。本日此学期最初の月次会を行ふ。定刻五時二、三分過ぐる頃晚餐を共にし七時より月次会を行ふ。

先生を始め先輩の亀井、多勢、平戸諸氏来舎され、舎生の休み中の話の後、有益なるお話を聞くことができ、又先生には厚岸の臨界実験所へ行かれ昨朝帰札されたにもかゝらず、いつものように御壮健で居られたことは、若い者への尊き何物かを与えられた。

尚、当日委員左の如し

樋口、加藤、藤田（康）、天辰の諸君。

又、平戸氏就職記念として左の寄付あり

一、金拾円也 会費寄付

一、金二円也 茶菓料（二日付）

十月四日（日） 稀に見る快晴にして全舎生舎より飛び出し、野へ行くもの、ハイキングするもの、又道展へも等々いづれも秋の空気を満喫したようだった。

十月五日 舎の池へ向く家より下水を流しているのを広瀬が発見、早速、取調べ抗議したところ取りのぞくことに決し、無事落着を見ることが出来た。

十月六日 二年生野外教練で野営の為、若松、藤田（一）（康）、永井の四君帰らず。パンクホーン、ハーンドン両氏のミスヴィードル号は本日午前〇時五分、無事ウェナッチー飛行場に着陸（所要時間四十一時間）太平洋の空を完全に征服する。

十月七日 本日、昨日出発の四君元気？にて帰舎。

十月八日 予三、臨教、野外教練に出発。

十月九日 昨日出発の連中いさゝかへバって帰る。上海港外に軍艦出動、おだやかならぬものあり。

十月十日 めっきり寒くなる。もう秋も半ばだ。樹の葉も少なくなったようだ。

十月十一日 本学予科対小樽高商の野球戦あり、増原好投し十四対三のスコアにて勝つ、夜は平戸君の就職コンパあり。

十月十二日 天辰君野外教練の為朝早くより用意をなし出発、予科ボーイは休みときめこみ、のんきな一日を送る。

十月十三日 天辰君帰舎、父君見えられた由、うれしそうだった。夜大塚君帰られる、もう体もすっかり良くなられたとのこと、なるほど顔色も気のせい少し肥えられたようおに見えた。十一時を過ぐる頃より雨となる。

十月十四日 秋葉、増井の両君演習より帰る。これで今秋の野外演習もすんだわけ。

十月十五日 楓林の原稿を締め切る。永井、増井君をのぞいてすべて集る、めずらしいことのようにだ。畑君明日の試験の為早く就寝、六時半から六号で大塚君の帰舎披露あり。近頃ハーモニカ練習毎日行はれる。

十月十七日 祭日、日曜と続くので桜林、若松、藤田(一)(康)永井、増井の六君石狩河口へキャンプに出掛ける。折から雨なるも頑張り十一時半出発す。後快晴となる。

十月十八日 予科対高商のテニス戦あり、予科快勝、スコアー不明。早慶第一回戦の放送あり、早大勝つ。石狩行きの連中元気よく夕方帰舎、ひどい風に吹かれたらし、本日「楓林」発行。

十月二十日 早慶第二回戦 2 - 1 にて慶大勝。

十月二十一日 睡眠不足の為、大塚君気分すぐれず、午頃より急に衰弱の度を加へられ一同不安の夜を送る。(早慶戦早大大勝す)

十月二十二日 早朝宮部先生来舎され、御注意のまゝ、大塚君大学病院へ入院、極度の神経衰弱と疲労の為なり。

十月二十三日 ハイフェッツ氏の演奏会松竹座で行はる。氏の入神の技に魅惑されて、多数これを聴きに行く。本間君夜を大塚君の所で明かす。

十月二十四日 本間君の連日の疲れをいやす為、今夜は大塚君の所で広瀬君が泊ることになる。新聞の報ずるところによれば、支那、日本の撤兵を要求す。大岩君殆んど晝間のすべてを病院で送る。

十月二十五日 風邪気味の者二、三名あり。

その為か日曜日かゝわらず外出する者少し。夜急行で大塚君の叔父様来札すぐ病院へ行かる。聞くところによれば、大塚君はパラチフスらしいとの由。本日ストーブ購入、庫に十三箇並んだのは壯観だった。

十月二十七日 本日決算をなす。一日の食費四十四銭なり。畑君、試験も済み非常にほがらかだった。五時頃大塚君の叔父様来訪され、茶菓料として二十円の寄贈あり。

十月二十八日 正午頃より気温降り、終に五時を報ずる頃より雪降りとなり、夜に至り相当の積雪を見る。蓋し初雪なり。

十月二十九日 晴れてはいるが、もう秋も半ば過ぎているのに気がつく、月も寒むそうだ。風邪を引いた人も早く元気になって藻岩へでも秋を見に行ってくれ。畑君悠々として試験休みを楽しみつゝあり。新聞によれば神宮フィールドで南部、織田の諸氏吾界記録を破る。

十月三十日 ハーモニカに、劇に猛練あり、記念祭近し。スキー部の新入生歓迎会あり(ホール五号)、三、四人これを聴きに行く。畑君より左記の本寄贈あり

一、左千夫歌集

十月三十一日 藤田康君の父君訃報あり、同君は夜九時の急行で帰京、こゝに謹みて哀悼の意を表す。

十一月一日 朝、天井の紙はりをやる。いよ 記念祭もせまったこととて、各部準備におこたりなし。夜十時支那ソバの饗応あり。

十一月二日 明日の練習のつもりで近所の子供を集めて余興の会を午後七時より開く。順序は明日のプログラム通りなり。

十一月三日 明治節

本日当舎第三十四回の記念祭を挙げる。

諸所の飾り付けも午前中に大体終了し、饗応部の面々も漸くそのクライマックスに達する頃、宮部舎長先づ来られ、続いて亀井、笹部、時田、多勢、平戸の諸先輩を迎へ、三時記念祭祭式を挙げる。

当日順序左の如し

- 一、着席
- 一、開会の辞（畑）
- 一、記念祭歌合唱（オルガン大岩）
- 一、副舎長挨拶
- 一、舎生の祝辞（畑、樋口）
- 一、先輩の祝辞（亀井、笹部）
- 一、先生の訓辞
- 一、祝電披露（畑）
- 一、青年寄宿舍萬歳（先生主唱）
- 一、宮部先生萬歳（本間君主唱）
- 一、閉会の辞（広瀬）

かくて非常な厳肅の裡に式を四時頃完了、続いて定刻よりおくれて六時十分前より晚餐を先生並びに諸先輩（此の時、鈴木現三、前川十郎の二氏も着席）等と共にす。先づ藤田（一）君の挨拶あり、委員の苦心の味に舌を楽しませた。尚七時二十分頃より余興にうつる。（当日のプログラムは省略）来賓は約三十名の多数に上り、その中元在舎の川原、清水、吉川の三君を迎へたことは喜しかった。

時も廻り、十時を四十分位過ぐる頃、余興も終り、こゝに第三十四回の記念祭も全く終了す。

十一月四日 本日予科、臨教の教練査閲あり。

空は快晴、秋も漸く深くなって居るのを思はせた。

十一月五日 記念祭も過ぎ、そろ 落ち着く。大学部教練査閲あり。九時より一号室にて慰労コンパあり。十時半頃解散する時、風が相当吹いていた。

十一月七日 新聞の報道によれば五日漢江附近に於て、黒竜江軍我軍を攻撃、我軍苦戦し

相等の死傷者を出す。一時頃より日米野球戦あり、立教7 - 0にて敗る。近頃体のコンディションの悪い者相当あり、夕飯の時なぞ7人もカゴを食べていた。

十一月九日 米口職業野球選手と六大学リーグとの試合、本日は早大4 - 7にて敗る。

やはり底の知れない力があるようだ。漢江の戦猛烈を極め、悪化しつつあり。

十一月十日 午後五時より竹家に於て記念祭慰労会あり。支那料理に腹をたらふく、一段二段三段と膨張させ、七時近く散会。さすがに腹の悪い連中もいよ 良くなったようだ、甚だ幸なる哉。

十一月十一日 本日左の三冊、若松君より寄贈あり

一、十九の夏

一、安城家の兄弟

一、天国の記録

十一月十二日 昨日払暁、洪澤栄一翁逝去、朝鮮の混成旅団との交代に第八師団混成旅団を組織して出動命令あり。

十一月十三日 秋もいよいよ深く、秋特有の空色も澄んでいるが、道も相等悪くなって来た。早や手稲は上口近く、白く見えてきた。

十一月十四日 大島、樋口、金森の三君、射撃演習の為、月寒まで出向く。畑君外泊、藤田康君午頃帰舎。

十一月十五日 射撃大会あり。大島君賞状をもらふ、樋口君は惜敗、日米野球戦あれど問題にならず。

十一月十八日 午頃より気温下り、ちら と雪を見ていたが、夕方より急に温度降下し、地面凍結、雪の為白くなる。地面凍結は、これをもって始めなり。もう冬も近く街の通りもいつの間にかオーバーにうずって通る人が多くなった。

十一月十九日 気温依然として上らず、夜に入り一寸位の積雪を見る。

十一月二十日 朝起きて見て、一面白雪なのに驚く。夕方頃より今シーズン初めてのツララを見る。

十一月二十一日 今学期最後の月次会を開く。六時より牛鍋にて腹を作り、七時半より月次会開会。先輩の中島、時田、平戸氏来訪さる。尚、当日委員左の如し、

畑、金森、山根、秋葉

続いて委員の改選にうつる、結果左の如し(略)。

十一月二十二日 本日決算を行う。一日四十八銭なり。

十一月二十三日 祭日の為学校は休みなるも文武会音楽部の公開演奏あり、当日左之諸君出演、

廣瀬(ギター)大島(コーラス) 桜林、金森(バイオリン)

プログラムは別紙通りにて折からの泥路をもちとわず六時二十分にして満員となる。

金森君の所へ家より「カニ」来り、皆其の饗應にあづかる。

十一月二十五日 満州出兵で新聞を毎日賑わしている。道は相変わらずひどいぬかるみが続

いている。本日山岳部報発行。

十一月二十六日 昨夜来の雪は五寸位になり大島君早速藻岩へ出掛ける。蓋し今シーズン
トップなり。

十一月二十七日 更に積雪あり、若松君、大島君、増井君等舎の前のスロープにて盛んに
尻もちに興ず。

十一月二十九日(日)

午後より桜林、若松、藤田(一)、永井の四君、桜林君に誘惑されて藻岩山へ雪を求め
て出向く。正に先端を行くの感あり。雪は降りもしないが、又容易に溶けもせず、道最
悪を極む。

十二月一日 いよ 十二月になった。あと一ヶ月で今年も逝ってしまふ、早いものだ。
今朝起きると雪降り、五寸位は積っていたらう。オールドボーイズもスキーに出てうれ
しかった。

十二月二日 若松君と藤田君円山方面へ出掛ける。

十二月三日 桜林君、天辰君藻岩登行、学校をサボッテまで出掛ける元気たのもしき限り
なり。畑君製図の為か帰りおそく、七時頃食堂によく見受けるようになった。

十二月四日 法学博士花井卓蔵氏ガスの為に逝去、我が法学会の為にその死は惜しまれて
いる。

十二月五日 昨夜来の雪は今朝になり、六、七寸位になり寄宿舍前のスロープ賑ふ。午後、
桜林君、大島君藻岩へ行く。

十二月六日 日曜なので前のスロープ早朝より子供等で賑ふ。須田七郎君三号でしばらく
話して行った。

十二月七日 廣瀬君此のシーズンの試験終了、ほがらかな笑顔だ。予科試験発表、十四日
より十九日迄なり。夜になり雨となる。

試験勉強もいよ 本格的となり十二時 - これからと窓の明りの消されるのはおそくな
った。

十二月十日 本日大塚君退院さる。気のせい、とても肥えられたようだ。何と云っても
健康第一、同君の御回復を喜ぶ。尚九時半より食堂で大塚君全快コンパを開く。先づ本
間君の一寸した開会の挨拶あり、次いで大塚君の御挨拶あり、一寸おくれて御令弟来ら
れ、スポーツマンらしく色々とお礼の言葉があった。その後戸外を見れば霏々として雪
が降り積っており、スキーに夢中になり、果ては廣瀬君、畑君まで出て時ならぬ賑ひを
見せていた。

十二月十一日 昨日の雪に、試験何こそと、勇敢にも藻岩へ出掛けた者に桜林、大島両君
あり有望有望。晝過ぎ宮部先生来訪され、大塚君の事を何かと聞かれたが、生憎大塚君
も本間君も不在でお気の毒だった。

若槻内閣總辞職す。本間君試験終了。

十二月十二日 犬飼氏に大命降下。畑君夜半過ぐるまで食堂で製図。

十二月十三日 新文相 鳩山一郎氏となる。

十二月十四日 朝九時の急行で大塚君先づ帰京さる。いよ 本日より予科、臨教の二学期期末試験、朝七時気温零下を示すにもかゝらず、すべて早起きし奇観を呈す。

昨夜永井君徹夜をなし、先づ物すごい所を見せる。

十二月十五日 本日より水産(秋葉、増井両君)試験。いつもなら試験となれば、とても物々しい緊張ぶりを見るのだが、此度は皆悠々たるものあり、九時頃茶を飲んで英気を養ふあたり、正に特筆に価す。

十二月十六日 夜になり少量の雪あり、試験もこれで半ばを過ぐ、各人の顔色沈痛なるものあり。

十二月十七日 夕飯の頃より雪降りとなり、もう試験もすむこととて喜んだが、すぐ晴れて、いさゝか失望。

十二月十八日 予三、臨教試験終了。MPへ行くもの、街へ行くもの、家には他の勉強の邪魔とあって各々目的へ行く。本日午頃、先輩北村氏訪問され、相憎、本間君不在で十号にて少しく話され帰って行かれた。何でも道農会へ出席の途中とか。尚氏はただ今、北見農事試験所勤務なり。

十二月十九日 予二、予一試験終了。午後七時より明葉三階で留別コンパを行ふ。席上大塚、吉田両君へ寄せ書をなし十時頃散会す。(藤田康君都合により欠席)

十二月二十日 大岩君、石君朝九時の急行で共に帰省、すべて朗らかだ。夕食後決算を行ふ。一日四十一銭なり。夜九時四十分で樋口、天辰の両君を例の踏切で送る。天辰君車のデッキよりハンカチをなびかせて別れを惜しむ。この時一瞬なれども劇的シーンを演出する。蓋し彼にして、なまめかしくもハンカチを出すとは、一同しばし忘我の境にありたればなり。畑君、増井君、若松君三角附近ヘスキーに行く。

十二月二十一日 先づ藤田康君朝六時五十九分で帰省、続いて桜林君スキーの合宿の為出発。午後より畑、金森、藤田(一)の三君円山附近ヘスキーに出掛く。水産試験終了。これで完全に此シーズンの試験も終る。

夜九時半、若松、増井、永井の三君山岳部合宿へ出発、尚おくれて大島君も山の合宿へ行く。

十二月二十二日 六時五十九分にて広瀬君スキー部合宿へ行く。ついで加藤君朝の八時頃帰省、これでいよ 六人になり淋しくなった。晩に肉鍋をつゝきながら、つくづく6人が少ないなと思った。

十二月二十三日 一寸廊下へ出て見れば、一人のことが多かった。雪はまだ降らない。石君から葉書あり、これが舎生からのトップなり。

十二月二十四日 夜本間君、内村会へ出席、亀井氏よりミカン一箱の寄贈あり。

十二月二十五日 大正天皇祭なので旗を出す

本間君、畑君いよ 帰省され、三時に両兄をステーションに送る。これで完全に四人の残留部隊となる。今日はクリスマスなので藤田君、秋葉君教会へ行き、金森、山根両

君夜はレコードをかけたり、ラジオを聞いたり、本を読んだりしながら時のたつのを待っていた。外は寒むそうに電車の燈が光って行ったり来たりしていた。メリークリスマス。記者も心からお祝いしよう。

十二月二十六日 午後、藤田、金森君正月の楽しみにトランプを買ひに行く。夜は山根君は先輩の所へ、秋葉君はMPへ行ったので、二人で五号で静かにレコードを聞く。

十二月二十七日 石澤氏の奥さんからミカン二箱送って下さる。別にすることもなく、どうも静かだと思ったら、四人とも晝寝をしていた。合宿の連中から葉書が来る。

とても元気なものだ、併し雪降り等もないので帰って来て残念がるだろう。

十二月二十八日 午後四時頃、広瀬、桜林の両君合宿より帰る。色すっかり黒くなった二人を迎えて、何となく賑やかになったようだ。

十二月二十九日 四時頃大島君帰舎、続いて八時の汽車で若松、永井、増井の三君合宿より帰る。“どうもあついな”山男然として先づオサへていた。併し札幌は雪がないのでヒカンしたろう。

十二月三十日 早朝より起き餅つきをやる。

中々達者なもので、例年の極端に平になるオカガミは今年は見られなかった。朝九時の汽車で大島君帰省、夜は七時より十二号に集り、故石沢達夫氏の第十一回目の追悼会を行ふ。先づ故人の人格をしのびつゝ、ミカンを食べ、ありし日の眞面目な人格をしのんだ。(寄せ書きをして送る) 次いで餅つき慰労コンパ並びに忘年会を兼ねて行ひ、十二時過ぎに散会。

十二月三十一日 年越ソバを皆共に食べ、淋しいような気持で前年を送る。いよ 昭和六年も逝く。振り返って見れば、その一年は日記の数十頁に過ぎなく、夢のように見えるもこれを迎へた時は新しい多大な希望をもって、昭和六年一月一日とカレンダーを見たものであった。併し今となり、果してどれ程の仕事をなし得たか、吾人は今静かに、この今一瞬にして逝く年をかへり見る時を持ちたいと思ふ。

リンデー、吾界レコードを破る(南部、織田)、支那出兵、トーキー等々考へて見れば相当変化のあつた年ということが出来よう。併し有機的な社会状態及び思想は何時、何処へ変つて行くか、我々はそこに数学的な理論は発見するに困難を感ずるものである。果して然らば、もし吾人が過ぐる一年間に於て、吾のすべての出来事を正しく理解し、而して此れをよく批判するに充分ならずとせば、更に来るべき変動に際して、最も大切なるべき根本的な批判力の有無を吾人は非常に疑ふものである。こゝに於て過去をかへり見ながら来るべき年こそ吾人は自己の充分な認識及びそれから純理論的に出発して来る完全な批判力の養成に心掛けることを高唱するものである。

もう数分にして一九三一年も逝く、今日こそ今宵こそ一年間のすべてが決算される日である。併しながら吾人は、いたづらに吾紀末的な感情にふけらなく、まじめに追想しつゝ、刻々とせまり来る新しい年を、新しい気持で受け入れるべく待つものである。